

鶏アスペルギルス症が発生した肉用鶏農場への指導事例

群馬県西部家畜保健衛生所

○高梨資子、林省二

平成 27 年 7 月、肉用鶏農場（4 棟で約 32,000 羽飼養、無投薬飼育）の 1 棟において、23 日齢で呼吸器症状等を呈し死亡羽数が増加したため病性鑑定を実施した。剖検では主要臓器に白色結節が散在し、真菌培養検査で *Aspergillus* 属菌を分離した。分離株についてコロニー形態観察、光学顕微鏡によるラクトフェノール標本の観察、分子生物学的解析を実施し、*A. flavus* と同定した。また病理組織学的検査で PAS 反応陽性菌糸を伴う肉芽腫性の炎症が確認され、*A. flavus* による鶏アスペルギルス症と診断した。発生鶏舎の出荷時の育成率は 50.0%であった。発生原因は特定できなかったが、同一孵卵場から同日導入し、同一飼料で飼育している他棟では死亡羽数増加が確認されないことから、鶏舎環境に原因があると推察された。聞き取りの結果、洗浄・消毒が不十分だったことから、出荷後の洗浄・消毒の方法を協議し、次の 4 点について立ち会い指導した。①分解可能な器具はすべて分解して洗浄を行い、真菌に効果のあるヨード剤で消毒する。②空舎時に鶏舎周辺の雑草を除去し、消石灰を散布する。③オガ粉は湿気のこもる山積みで保管せず、入雛前に全て敷き詰める。④空舎期間を延長できないため、洗浄する人員を増員する。さらに鶏舎の洗浄・消毒が確実にできたかを調べるため、消毒実施前後の鶏舎内の落下真菌数を測定したところ、真菌数の低下を確認した。次のロット以降死亡羽数は増加することなく、発生鶏舎の育成率は 96.4%であった。

肉用鶏は空舎期間が短く、洗浄・消毒を計画的、効率的に確実に実施することの重要性を再認識した。